沖縄県やえやま幼稚園に関する研究２：保育内容の分析を中心に*

喜舎場　勤　子**

Abstract

This study aims to reveal the Childcare Contents at Yaeyama kindergarten between 1933 and 1945, with the help of newly discovered historical documents, and follow-up to previous research on the same subject. The results of this study are as follows. First, Mrs. Tsurue Makishi, who had neither a background in nor exposure to kindergarten education, misunderstood a kindergarten to mean an elementary school. The concept of kindergarten, which was developed by Frobel, was introduced to Japan by the United States, and kindergarten practices were modified at the time by practitioners to reflect the Japanese style of teaching. In addition, the management and teaching methods differed across kindergartens and elementary schools. Second, as a kindergarten teacher, Mrs. Makishi appreciated the profession. Through continued efforts, she succeeded in improving the working conditions and compensation of the teachers–at the same time, these teachers were not as valued as the other teachers which belong to upper school. Lastly, a unique educational method was prevalent on Ishigaki Island during this period; the method was developed by the citizens even though the state had a stronger control over education and related practices.

はじめに

拙稿「沖縄県やえやま幼稚園に関する研究１：設立趣意書と園則の分析を中心に」（以下、前稿と表記）では、やえやま幼稚園の実質的創設者である牧志ツルエ[1]が作成した設立趣意書等を分析し、当初構想された幼稚園像を明らかにした。本稿では、前稿同様、主として牧志家資料に依り、当時の保育内容を実証的に描くことを目的とする。その際、新史料の発掘も視野に入れ実践を跡づけたい。対象時期は、おおむね開園（1933）から沖縄戦（1945）までとする。

１．幼稚園の設備

宜保（1976／1986）の研究では、保育内容の概要が描きだされた。本節では、今回の収集・発掘調査で見つかった史料等を基に保育設備や内容の跡づけを行う。表１は、幼稚園設立趣意書（1933.4.20／一高女同窓会作成）に記載された予算項目「備品並に保育用品費一切　505円」の内訳である。目をひくものとして、「黒板」「教壇」「幼児楽隊用具」[2]「動植物昆虫標本類」「フレーベル式第２・６・７・１３恩物」「同第１手技及第９手技」「７巧板６色３体」「虫眼鏡」「実体写真鏡」「床上積木」「参考書」があり、当時の保育内容を象徴しているようで興味深い。各々については、以下、関連箇所で述べていくこととするが、はじめに表１で示した予算見積書の作成過程を辿りたい。

---

*A study on the Yaeyama kindergarten in Okinawa 2: Focusing on the Childcare Contents

** Isoko Kishaba

写真１は、「昭和８年」（1933）の日付が入った業者発行見積書である。大見謝指物店の店主大見謝恒用（詳細不明）の署名入りで９品目について見積もられ、幼児用机（杉材 6個 28円80銭）、同腰掛（杉材 40脚 32円）、保母用机（センダン材 1脚 12円）、同椅子（タップス張1脚 5円）、黒板 同□共（杉材　1枚 7円50銭）、教壇（杉材 1個 3円50銭）、下駄箱（杉材1個 6円50銭）、三角□弁当箱（杉材 1個 4円50銭）、塵取箱（杉材 1個 1円20銭）と記されている。設立趣意書では幼児用机が36円であるのに対し、上掲の見積もりでは28円80銭といった違いはあるものの、計上項目の順番も違わずほぼ同品目同額であることから、幼稚園設立趣意書に記載された予算書（表１）は大見謝の見積もりを基に作成されていたことがわかる。前稿で言及したとおり、やえやま幼稚園設立当初、地域社会の幼稚園設立要望は皆無に等しく、したがって資金集めも難航した。今回、入手した当時の領収書からは、開園時に予算計上された備品が園児増等の現状を見極めながら、徐々に整備されていった様子が垣間見られた。例えば、1938年４月（写真２）にはブランコ１基（8円50銭）生徒用机１脚（8円50銭）同腰掛16脚（14円40銭）、1939年４月30日（写真３）には生徒机２脚（19円）同腰掛14脚（14円）、さらに1943年12月31日（写真４）には木銃20本（5円）の領収書が発行されている。地元業者については、他にも画用紙等の文具を扱うタカタ商店、三島庄太郎商店、上原店等の領収書もあった。筆者の知る限り、沖縄県内において、戦前の幼稚園における具体的な保育備品関連の書類はこれまで表にでてきたことはなく、このようにある程度まとまって保管されていることは、当時の保育実践を解明する上で有用だと考える。

潮平正道氏（6期生 /1939年卒）[3]によると、幼稚園の教室はほとんど小学校と同様な配置で、前方に「黒板」と「教壇」がおかれ、対面するように２名がけ園児机と腰掛けがおかれていたという。園舎の軒下には、鉄製の大きな鐘[4]が吊り下げられ、活動の始まりと終わりを告げる合図として使われていた。当時、幼稚園の一日の流れは小学校のあり方に近く、活動は時間により区切られ、活動と活動の間に自由に遊べる時間が設定されていた。活動終了時の鐘が鳴ると、子どもたちは喜んで園庭へ飛び出し、自由に遊び、再び始業を告げる鐘の音により教室へ移動していたとのことである。『やえやま幼稚園五十年の歴史』（pp83-84 ／ p53 ／以下『五十年記念誌』と表記）によると、園庭での遊びについては、とくにブランコの人気がたかく、長い間順番を待って乗れたこと、またわんぱくな子どもが時々待てずに割り込みをしたことなどが、後日、卒園生により語られている。ブランコについては、第１期生の外間完和氏も言及していることから開園当初から設置されており、園児らの人気を受けて1938年４月（前掲）に購入・増設されたものと思われる。

品目	数量	金額	品目	数量	金額
杉材幼児用机	6脚	円 銭 36.00	磁石	3打	4.80
腰掛	40脚	32.00	実体写真鏡	1組	12.00
センダン材保母用机	1脚	12.00	幼児楽隊用具	1組	18.00
同椅子	2脚	10.00	ママゴト用具及砂場用具	6揃	9.00
黒板及黒板代(ママ)	1台	7.50	ベルト滑台	1基	13.50
教壇	1個	3.50	鉄製シーソ４人乗	1基	15.00
下駄箱	1個	6.50	シングルベルス	4筋	5.20
弁当戸棚	1個	4.50	投輪	1組	4.80
塵取箱	1個	1.20	５色旗各２枚づつ(ママ)	１０枚	2.00
丸盆	10枚	3.00	木剣	１０本	2.00
ブランコ	1台	15.00	木銃	１０本	3.10
額縁	2個	2.80	出席簿・在籍簿・月謝袋	各100	4.40
掛図絵並に装飾用絵	15枚	17.50	平版用品材料		8.86
動植物昆虫標本類	60種	31.50	紅白銀引縄	1筋	4.50
フレーベル式第２・６・７・13恩物	40組	46.95	行進馬	2台	9.00
同第１手技及第９手技	40組	10.40	トロッコ	2台	6.00
独楽	40個	3.60	床上積木	1組	17.00
ゴム豆	300個	2.10	新案バスケットボール	2台1組	25.00
７巧板６色３体	40組	30.00	フットボール５号	2個	10.00
綾掛枠	15組	6.75	砂場背景	2組	3.40
虫眼鏡	3打	6.00	参考書	35冊	48.63

表１　幼稚園設立予算見積

出典：記念事業期成会 1984 やえやま幼稚園五十年の歴史 pp144-145 より筆者作成。出典を同にする表は宜保（1986）にも掲載されている。

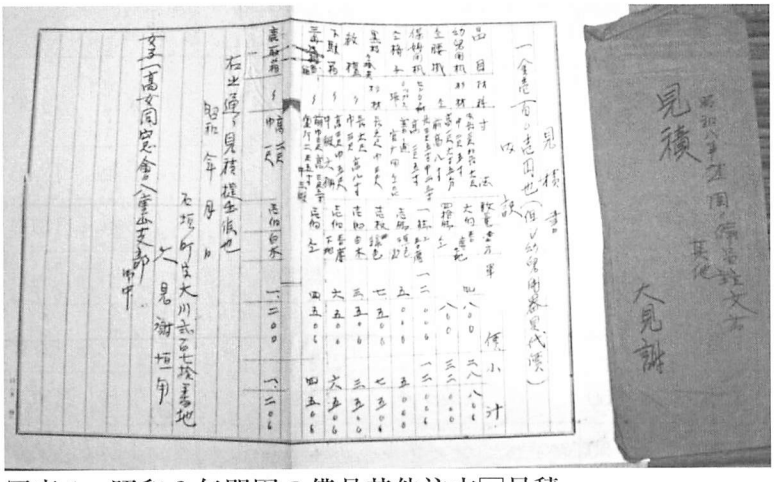

写真１　昭和８年開園の備品其他注文□見積

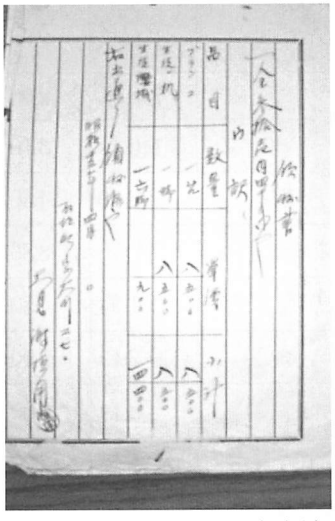

写真２　大見謝恒用印領収書

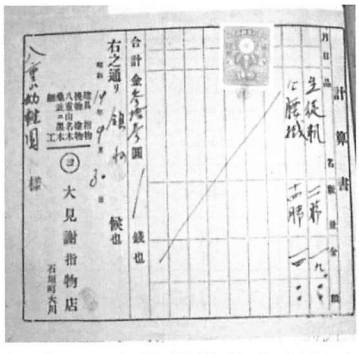

写真３　大見謝指物店領収書

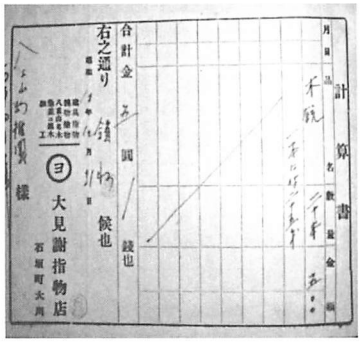

写真４　大見謝指物店領収書

出典：写真 1.2.3.4 は石垣市立図書館所蔵（牧志家資料）

２．保育項目

やえやま幼稚園の保育内容を規定する保育項目は、園則第７条で「遊戯、唱歌、観察、談話、手技、自由運動」と定められた。これは、幼稚園令（勅令第74号／1926）を受け整備された「幼稚園令施行規則」（文部省令第17号／1926）の「遊戯、唱歌、観察、談話、手技等」に準じたものである。従来の保育４項目に「観察」が加えられ、さらに「等」を付すことで各幼稚園における保育内容の独自性や自由さを保障し、小学校との差別化が意図されていた（文部省1979）。したがって、同園独自に制定された「自由運動」にこそ本園の特徴が表れているが、史料そのものの入手に制限があり、同項目の詳細や実践といった実体解明については新史料の発掘を待ちたい。本節では、今回の史料収集および調査で比較的多く入手できた関連史料に基づき、主として「観察、談話」の実践について述べることとする。

（１）観察

『キンダーブック　第１号・お米の巻』（1927.11）が、幼稚園令（1926）制定で新たにたてられた保育項目「観察」を受けて創刊されたことは周知のとおりである。このような流れを汲み、同園でもキンダーブックは定期購入されていた。写真５はキンダーブック関連の領収書だが、左から「領収書 No9243　16円50銭　」（1938.6.23）、「領収書 No11159　77円60銭」

(1938.8.15)、「領収書 No5587　59 円 40 銭」（1937.5.29）である。納品された絵雑誌については、「領収書 No9243」（1938.6.23）に「＃２花と実」、「領収書 No11159」(1938.8.15) に「＃１良い子供」と青色スタンプで押印されている。他にも「請求書」（1938.6.25）として「＃ 12 兵隊さん 15 冊／４円 50 銭」「＃１あゝ嬉しい 20 冊／６円」「＃２花と実 20 冊／６円」「＃３猫□はなし 20 冊／６円」の合計 22 円 50 銭や「請求書」（1940.4.25）として「前分残金／ 12 円」「＃ 10 小馬の話 40 冊／ 12 円」「＃ 11 我等の日本 40 冊／ 12 円」「＃ 12 □しい支那　40 冊／ 12 円」「4 月春が来た 40 冊／ 12 円」の合計 60 円があった。卒園生の潮平氏や上掲史料からは、同絵雑誌が幼稚園の保育教材として取り寄せられていたほか、各家庭へも希望を募り配布していたことがわかる。潮平氏自身については、幼稚園で希望を募る際、親の許可をとらず無邪気に手をあげ、帰宅後、勝手に注文したことで怒られたことをエピソードとして語っている。

一部戦後出版のものを含むが、牧志家所収のキンダーブックは写真６のとおりであった。写真左上から右上へそして左下から右下の順に、第 10 号第７編オモシロイアソビ（1945.10.20）・第 10 号第６編ナカヨシ (1945.9.20)・第 12 号第８編ミンナデイッシャウケンメイ (1939.11.20)・第 13 号第９編キシャ (1940.12.20)・第 14 号第１編オトモダチ (1941.4.20)・第 13 号第８編トリ (1940.11.20) である。写真６中、戦後出版の２冊をのぞく４雑誌の冒頭、倉橋惣三（1882 － 1955）の署名入り解説が掲載されている。ここで述べるまでもなく、倉橋は東京女子高等師範学校教授および日本初の幼稚園である同附属幼稚園主事（園長）を経た後、日本保育学会を設立し初代会長を務めたことなどから、近代日本における幼児教育の礎石を築いたと評される人物である。そもそもキンダーブックと倉橋は深いかかわりがあり、創刊（1927）から倉橋が逝去する 1955 年８月号まで編集顧問としてかかわっていた[5)]。前稿で指摘した同園設立時の文書類に散見された倉橋からの影響は、今回見つかったキンダーブックがそのひとつの情報源であったと考えられる。しかしながら、保母らの語り（前稿）にみられたとおり、関東や関西からも保育関連書物を取り寄せていたこと、また表１の予算見積書の中で、「参考書 35 冊」「48 円 63 銭」が計上されていることから、倉橋理論を摂取した書籍が他にもあったと思われるが、現在のところ特定に至る史料は発見されていない。

平岩定法（1996）によると、キンダーブックは創刊当初、観察手法としてありのままを忠実に描くことを重視した本格的な絵雑誌をめざしていたとされ、その後の 1932 年頃から 1937 年頃にかけては内容の刷新が試みられている。やえやま幼稚園（1933）初期の保育実践は、平岩が区分する刷新期に該当し、戦前出版された「第 13 号第８編トリ（1940.11.20）」の自然観察のほか、「第 12 号第８編ミンナデイッシャウケンメイ（1939.11.20）」「第 13 号第９編キシャ（1940.12.20）」「第 14 号第１編オトモダチ（1941.4.20）」といった社会観察に分類できるものもあった。興味深いのは、表１の予算書に「動植物昆虫標本類 60 種」や「虫眼鏡」「実体写真鏡」が盛り込まれたことである。創刊期キンダーブックが意図した「ありのままを忠実に描く」ことに呼応した自然観察を重視した表れかとも考えられる。しかし、上述のとおり、当時の保育界の動向としては、1932 年頃から写実主義的自然科学教育からの転換がなされていた。また、冨崎望（1983）も明治末期頃からは、倉橋自身が公の場で形式主義的恩物を批判し、机上保育から戸外保育へ、そして幼児の自発性や生活を重視した自然保育や自由保育といった後の誘導保育論に完結する独自の子ども観や保育観を活発に発信しはじめたと述べている。これらのことと照らし合わせても、倉橋の唱える保育論と「フレーベル式第２・６・７・１３恩物」「同第１手技及第９手技」「７巧板６色３体」にみられる当時のやえやま幼稚園の保育実践が乖離

していたという印象は拭えない。

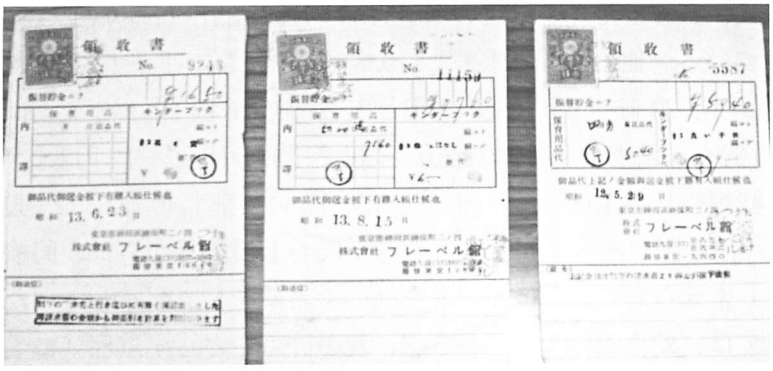

写真5　キンダーブック領収書

写真6　キンダーブック

出典：写真5.6は石垣市立図書館所蔵（牧志家資料）

（2）談話

大正期から昭和初期の「談話」に関する地域実践を扱った研究に、小山みずえ（2008）がある。同論稿では、同時期の保育実践が主に徳目に傾斜したものであったとする定説を批判的に検討し、米国のストーリーテーリング理論に影響を受けた「幼児に喜びを与えること」「保母と幼児が心を通わせること」を主眼とした新たな「お話」観の成立について論じている。そして、それが従来の枠組みを超えた「談話」理解の普及や大阪市における教育実践へつながっていった。幼稚園教育における実践については、義務教育制度から外れていたという事情も含め、地域毎の多様性が存在する。このような意味では上掲のあり方はその一例である。本節では、地方実践研究の積み重ねが全国的な実態を浮き彫りにするという立ち位置から、昭和初期やえやま幼稚園の「談話」実践の特徴をとらえたい。具体的には、『五十年記念誌』（pp73-75）所収の大山トヨ（在職1938-1943／旧姓 糸数）の語りを考察する。

大山によると、やえやま幼稚園は午前8時30分の登園にはじまり、お弁当の時間も含め午後2時30分の降園をもって終了していた。一日の流れについては、「お昼のお弁当が済むと、先生のお話の時間、童話や民話を話し聞かせ、なぞなぞあそびにも興味をもたせた。－中略－お話が済むと想像力を養うために、聞いたお話を題材としてお絵書きに入るか、工作、ねんど細工等へと移ることもあれば、歌のおけいこや歌劇などへと誘うこともあった。」と述べられ

ている。これらの語りからは、小山（2008）が述べた「幼児に喜びを与えること」「保母と幼児が心を通わせること」からさらに拡大した、現行『幼稚園教育要領』（2008 告示）の「表現」にも重なる実践と捉えることもできる。また、興味深いのは、帰宅時間がちかづくと「子どもたちは静かに一日の反省」へと移り、皆の前で今日一日の印象に残った感想を発表させたり、20 分程度の「朝の発表」も取り入れたりしていたことである。これらは「生活発表」「言語指導」と呼ばれ、昨日の家庭での出来事や様子が話された。大山は「入園して二、三ヶ月頃まではなかなか話せない子どもたちでも一度一人で立って話すようになれば、それから話すことが好きになり、半年も立つと朝の生活発表が心から楽しくなり競って前へ進みでて実に愉快に家での出来ごとを細々と発表してくれた。このようにして子どもたちの言語の発達も、日を追うて伸びていく。」と述べている。

石垣島は、児童文学研究において、大正・昭和初期の知識層による実践が注目されている地域でもある。なかでも、中央気象台附属石垣島測候所所長を務めた岩崎卓爾（1869-1937）と沖縄学の父と称される伊波普猷（1876-1947）の文化実践運動との関連が、斎木喜美子（2004）により指摘されてきた。そこで、設立当初から同園と深く関わり２代目園長へ就任した岩崎卓爾に着目し、上掲した大山の語りを文化実践運動と照らし合わせて検討したい[6)]。岩崎卓爾は記述のとおり測候所所長を本業としたが、逝去するまでの 40 年間を石垣島で過ごし教育界はじめ地域の伝統・文化など多岐にわたり影響を与え、沖縄県より教育功労賞（1914）を石垣市より名誉市民（2001）を授与された人物でもある。このように土地の名士として人々から信頼され、また島を訪れる研究者で岩崎の世話にならない者はなかったといわれるほど多大な影響力を持っていた。斎木は、伊波普猶の「子供の会」（1913.3.9-1914.2.8）と、同時期に石垣島で立ち上げられた「子供の会」（1913.9.7）の手法や主眼の類似性を指摘し、伊波の系譜に石垣島の活動を位置付けている（斎木 pp38-40 ／ 133 ／ 150）。酷似している点として、①当時の複雑な時代背景の中で沖縄の歴史や文化に誇りを持つ自立した人材育成を主眼に、意識変革を意図した啓蒙活動であったこと、②公立小学校教員らを中心とする文化人あるいは知識層が活動を牽引したこと、③徳目等の訓示的なものでなく世界の児童文学など様々な作品が講和として語られたこと、④講師だけでなく子どもたちも前へださせ自由に発表させていたことなどが挙げられる。このような活動は海を越えて沖縄本島から石垣島へ渡るのであるが、同地域の文化実践は様々な人物が絡み合いながら浸透していくという特徴も合わせ持っていた（斎木 pp151-152）。たとえば、石垣島の「子供の会」は、沖縄音楽界の父と形容され多数の童謡や著名な楽曲を残した宮良長包（1883-1939）が、伊波の活動に触発されて地元有志と共に活動を立ち上げたものであるが、その有志の一人が岩崎であった。そしてその後、岩崎は顧問として運営にかかわっている。また、岩崎と郷土史研究の父と言われた喜舎場永珣（1885-1972）とは研究を介した近い関係にあった。さらに、戦後初の女性市議会議員で石垣市立みやまえ幼稚園設立にも貢献した郷土史研究家の宮城文（1891-1990）と早稲田大学総長を務めた大浜信泉（1891-1976）、そして国語学者の宮良当壮（1893-1964）などは喜舎場の教員時代の教え子である。そして、宮良長包・喜舎場永珣・宮城文らは共に教員であった。

時代は若干さかのぼるが、「子供の会」を生みだす胎動期となった明治末期、当時活発化していたキリスト教と連動した社会変革の機運は「文化創造のエネルギーが吹き上げてきた時代」（斎木 p22）と評され、この表出したエネルギーが伊波普猷らの「子供の会」、そしてキリスト教教会や図書館での活動を拠点として、地域の意識変革といった啓蒙の役割を果たしながら飛

び火していた[7]。石垣島の活動がキリスト教的思想を含むかどうかは別として、明治期から沖縄戦前（1945）を貫く同化・皇民化教育とは異なる「教会や図書館での学習を基盤に学校教育に対抗するかたちで展開されていく流れ」（斎木 p23）という独自の文化潮流があったことは非常に興味深い。これらの活動はその後も衰退することなく、ある種の文化レベルとして八重山において維持・継承されていた。斎木は、その根拠を戦後の荒廃期に人口僅かな島で相次いで雑誌の創刊がなされた「文芸復興期」（1946-1949 ／ p94）と呼ばれる文化現象に求めている[8]。

上述したことから、岩崎卓爾という影響力を持つ知識人や教員らによる、当時強力に推進された同化・皇民化教育とは異なる独自の潮流、すなわち地域の文化実践に支えられる教育手法が教員らを中心に学校教育へ持ち込まれたとする見解もあながち飛躍した論法とはならない。そして、やえやま幼稚園の実質的な設立者であり教員経験も有していた牧志ツルエや後に小学校教員へ転職した同園保母らが、その職歴から推し測って考えると、上掲の文化実践運動の担い手であったといえる。「子供の会」（1913）から同園開園（1933）まで20年もの時間的経過があるものの、大山の実践にみられる「生活発表」は伊波の「子供の会」を彷彿とさせ、明治末期を起点とし、沖縄戦（1945）を経た戦後の「文芸復興期」へ連なる幼稚園における教育実践と見ることも可能ではないだろうか。このような意味においては、国家主義的様相が濃厚となる当時、同園の保育項目「談話」における実践は先駆的あるいは特筆に価する開かれたものであったといえる。

おわりに

既述してきたとおり、戦前のやえやま幼稚園は、日本本土から書籍や保育関連備品を摂取しており物的に豊かな保育環境であった。とくに、現存する領収書や請求書等の史料からはキンダーブックやその他の科学教材はじめ楽器等、当時の県内幼稚園としては豊富にそろっていたことがわかる。また、幼稚園のあり方については、学校的な教室配置、始業の鐘による活動の区切り、主に机上の活動を中心とした教師中心型の一斉指導といった実態が関係者のインタビューや記録から浮かびあがってきた。これらは、幼稚園というよりむしろ小学校のあり方に近い。しかしながら、国内における幼稚園の小学校準備教育的保育への批判については、「幼稚園保育及設備規程」（1899 ／文部省令第32号）において、すでに見直される動きにあった（湯川嘉津美 2004）。また、同園で比較的豊かにそろっていたフレーベル教材についても、当時の保育界では米国進歩主義教育の影響を受けて倉橋らを中心に形式主義フレーベル恩物からの転換がはかられていた。これらと照らし合わせると、当時の保育界主流の動向とやえやま幼稚園の実践は必ずしも合致しない。おそらく、その理由のひとつは牧志ツルエ自身の経歴が関係しているものと思われる。前稿でも述べたとおり、牧志は、沖縄県立第一高等女学校卒後（1913）、沖縄県師範学校女子講習科（1914 ／沖縄県女子師範学校前身）を修め、文部省第六臨時教員養成所（1917）を経て、朝鮮鎮南浦公立高等女学校教諭（1917-1919）そして母校の沖縄県女子師範学校兼沖縄県第一高等女学校教諭（1919-1925）を勤めている。つまり、保母養成所あるいは幼児教育関連の学校歴を持っていない。東京女子高等師範学校附属幼稚園（1876）が我が国初として開園して以来、幼稚園における実践・省察そして理論への反映といった地道な積み重ねが日本の保育を形づくってきた。牧志自身の学校歴からくるバイアスは、摂取した幼稚園情報を小学校的なものへ読み替えてしまった可能性がある。そしてそれは、同様に小学校訓導の教員免許保持者でもあった初代保母らへそのまま引き継がれたものと思われる。

しかし一方では、牧志自身の教員経歴は、幼稚園保母の専門性を評価する視点へもつながっていた。それは、前稿で述べたとおり、教員免許状保持者であり幼稚園教諭としての経験があった初代保母石垣初枝（1933-1947 頃／旧姓 末吉）の獲得経緯に表れた強いこだわりにも看取できる。また、牧志は大山（前掲）へ学費の全面援助を申し出ており、「帝国女子専門学校の家庭科家事科」への進学を勧めたというエピソードにも見られるとおりである（『五十年記念誌』p50）。結局、大山の父親の賛同が得られず、牧志の申し出は受け入れられなかったが、その後、大山は親の支援で「帝都教育会附属教員保母養成所」へ進学した（『五十年記念誌』p48）。幼稚園設立当初の給与については、石垣自ら月給 30 円･賞与 10 円（年間）であったと語っており、同時としてはめずらしく賞与が支払われていた。財政的に厳しい経済状況下、その人件費は牧志ツルエの夫牧志宗得（開業医でもあり戦後の石垣市長を務めた）の私財から支出されており、幼稚園保母の専門性に対するツルエの運営方針の表れである（『五十年記念誌』p46）。また、園内住み込みで雑務を担う「小使」（宜保 1986・p333 ／潮平氏談）もおり、幼稚園保母らが保育に専念できるよう配慮されていた。補助教員としてもう１名「大浜秀子」（宜保 1986・p341 ／詳細不詳）が無給で働いていたようであるが、経歴等により職位を付し差別化していたと思われる。

指導案については、牧志の徹底した厳しい指導があった。後に大山が語った、同園の教材研究が小学校より難しかったこと、また土曜日に１週間分の保育案を牧志へ見せることは気が重かったなどのエピソードに見ることができる。石垣も台湾へ疎開時、当地の勤務校で１年分の遊戯や歌を本にしてほしいとの依頼があった際、やえやま幼稚園で鍛えられた経験があるため容易にまとめることができたという主旨のことを語っており、日々の保育については妥協を許さない徹底した牧志の指導があったことがわかる（『五十年記念誌』pp49-51）。

最後に、既述したことから、戦前やえやま幼稚園の特徴的な「談話」実践が浮かび上がってきた。同化政策や皇民化教育へ急速に傾斜していく時代の中、国家管理とは別の文化潮流が石垣島に住む人々の中にあったこと、そしてそれが教員らにより学校教育へ持ち込まれ独自の保育実践を生みだしたことは、非常に画期的であったといえる。しかしながら、大山の語りそのものが時間的に経過した戦後のものであるため、これらを跡づける傍証史料との整合性を含め、今後慎重に検証したい。

【註】

1）名前表記は、「保母免許状」（1941.3.31 第 14 号 / 牧志家資料）に準じカタカナとする。

2）初代幼稚園保母の石垣初枝（在職 1933-1947 頃／旧姓 末吉）によると、やえやま幼稚園では大太鼓・シンバル・カスタネット・笛等の楽器がそろっており、合奏団を編成して町をねり歩いたことが語られている。石垣は、一年半程同園で勤めたあと本島へ帰省し、後に復職。さらに台湾へ疎開した際、幼稚園や小学校で勤め、再び石垣島へ戻り 1947 年頃まで同園で勤務した。その後、小学校教諭へ転職している。『五十年記念誌』（pp42-52）参照。

3）潮平氏へは２回のインタビューを行った。１回目 2011.6.13　14:30 - 18:00、２回目 2011.6.15　10:20 - 11:20　石垣市立図書館他にて。

4）『五十年記念誌』（p137）に写真が掲載されている。

5）大橋（2011）は、当時の幼児向け雑誌が婦人雑誌と共に、私的領域である家庭へ良妻賢母思想を含む国策を進入させる管理・支配的イデオロギー装置として機能したと述べている。

その論拠として、倉橋を含む複数の論客が編集責任者として両雑誌に積極的にかかわり、家庭教育の観点から活発に発言したこと、そして倉橋の国家との密接な職歴をあげている。とりわけ、幼児向け絵雑誌に掲載された識者による「お母様方」には、伝達が期待された思想的内容が集約されていた。牧志家所収のキンダーブックでは、「お母様方」のみならず「お母様と先生方へ」と表記され「先生方」も含まれる。この件については、本論の目的と異なるため筆を改めたい。大橋眞由美　2011 エージェントとしての「お母様方」の成立：倉橋惣三と『日本幼年』1915-23　大阪府立大学人間社会学研究集録 189-210。

6）決議録によると初代園長として岩崎卓爾の名前があげられた。しかし、実際には副園長として就任しており、その背景には本人の固辞があったものと思われる。「県女子師範学校県立第一高等女学校同窓会八重山支部　幼稚園設置に関する第一回実行委員会決議事項」（『五十年記念誌』p144）参照。

7）同時期のキリスト教教会の動向と私立幼稚園の教育実践については、拙稿 2006 沖縄県における善隣幼稚園に関する考察：設立時期を中心に 保育学研究 44(2)　104-113、および、2008 沖縄県における善隣幼稚園に関する考察 2：定着過程に着目して　保育学研究 46(2) 267-276 に詳しい。

8）創刊が相次ぐ雑誌の中に、幼児向け雑誌『青い鳥』（1949）が含まれていた。

【引用文献】

宜保美恵子 1976 沖縄における幼児保育の歩み　**保育学年報** 1976 年版　125-142

宜保美恵子 1986 沖縄県幼児保育史（第 2 報）：やえやま幼稚園について　**琉球大学教育学部紀要**第 2 部（29）325-353

平岩定法 1996 倉橋惣三と月刊保育絵本「キンダーブック」：昭和 2 年から昭和 30 年まで　**日本保育学会大会研究論集** 49　694-695

記念事業期成会 1984 **やえやま幼稚園五十年の歴史**　富川印刷所　73-89

小山みずえ 2008 大正・昭和初期の幼稚園における「お話」の成立過程：大阪市立幼稚園における実践・研究を中心に　**保育学研究** 46（2）257-266

文部省 1979 **幼稚園教育百年史**　ひかりのくに　204-261

斎木喜美子 2004 **近代沖縄における児童文化・児童文学の研究**　風間書房　93-142

冨崎望 1983 倉橋惣三の幼児教育論について：誘導保育論の形成過程の考察を中心として　**中村学園研究紀要**第 16 号　85-94

湯川嘉津美 2004 日本における幼稚園の設立：幼稚園成立史の研究から　**幼児の研究** 103（1）8-15

【凡例】

史料のカタカナ表記はひらがなへ、旧漢字は新漢字に変えて引用した。ただし、固有名詞は原文のままとした。また、判読不可能な文字は□で表した。

【謝辞】

論文執筆にあたり、ご理解を賜りご配慮いただきました石垣市立図書館長真謝悦子氏および司書石垣司氏へ記して感謝いたします。